

新しい方法とテーマを携えた強いエネルギーに出会いたい

足立正生監督に聞く

(映画監督、「インターナショナル・コンペティション」審査員)

自分にとってドキュメンタリー映画とは何かと問われてもあまり意味が無い。映画を作ることに於いて、ドラマもドキュメンタリーもないよ。例えば、かつて私がパレスチナで映画を撮っていた時、解放戦線の兵士たちはカメラの前で「こうあるべき兵士」を演じ始めた。私はがっかりしてその場は撮影しなかったけれど、その晩、隊長が兵士たちに「これはプロパガンダなのだから、われわれはゲリラであると同時に俳優もできなければゲリラとは言えないのだ」と演説をぶち始めた。こちらとしては鬱々とするんだけど、でも、彼らがそう言うのであればいいじゃないかと思うようになった。そして、カメラの前で彼らという主体が俳優に変わるのであれば、自分もドキュメンタリーのカメラマンを演じなければいけないのではないかと思った。

佐藤真や小川紳介のように、ある場所に腰を据えて、記録すべき対象を、対象自体が変わる所も含めてじっと見つめていく、その中で自分自身を問うていくというような、記録するという意味での王道の方法がある。けれどもそれを編集するということは、ドラマを作るのとどこが違うのか。記録映画とドラマは、編集することにおいて同じだと思う。ニュース映画やニュース番組だってそうだ。編集というのは作る側の主観と主張で為されるのだから。

自分が撮ろうと思う対象に対して、対象だけでなく自分をも問うていくというのは、対象と撮影者との関係性、つまり対象の主体性に作家の主体性がどう反映されるかということを見ていくことになる。そしてまた、作者の主体性と同時に観客の主体性も問われてくる。ドキュメンタリーの面白さというのはこういう所にあるはずだ。そういった視点でドキュメンタリーについて考えていきたいと思っている。例えば私は、『赤P』（『赤軍——PFLP 世界戦争宣言』、1971）は報道映画だと言っているんだけど、今年とある場所で『赤P』を編集しなおしてフリージャズのライブ上映に使ったらしい。私はその上映を見に行き、『赤P』はニュース映画なんだから、かつてのままを再現するんじゃない

くて、今どうなのかという提案をすればいいんだ。新しい映像もぶち込んでやっていいんだ。素晴らしい、よくやってくれた」と褒めた。こういうのが上映の良さだよ。昔の作品を見ることで現在を照らし出すという方法もあるけれども、同時に、自分たちがその作品をどう見たかを上映する側が表現するのは素晴らしいよ。そこまで行きたいと思う。

山形国際ドキュメンタリー映画祭では、コンペティション部門でも「アジア千波万波」でも、若い人々が新しい現実に対して向き合った作品が集結してくる。そうやって集まってくるものに今度は自分が対峙して、自分が考えている世界や現実と彼らが直面している現実との違いを知りたい。そして、彼らが彼ら自身の現実をどう表現しようとしているのか、その新しい主張と新しい方法を見つけたい。審査員を務めるというのは、高みから見下ろして作品を審査するのではなく、そういう新しさに出会えることの素晴らしさを語る権利を維持するということ。それが、私が審査員を務めるにあたっての立場です。小川紳介を始めとして、この映画祭をこれまで作ってきた人たちの歴史的な思い入れもあるだろうけれども、「YAMAGATA」と表記されるような世界的な場に集まってくる、新しい方法とテーマを携えた強いエネルギーに出会いたいと思っている。

今回山形で出会うであろう作品や作家はおそらく、彼らの生きる国の現実に対してどう向き合うかという運動をしているはずだ。言ってみれば「映画を撮る」ということ自体も運動だ。私は彼らの運動を見たいと思う。映画作品として完結しているものもあるかもしれないけれど、概ねそうじゃないだろう。作品として完結するのではなくて、次の映画祭でもその次の映画祭でも、彼らの運動について報告してくれるようなことが起こってほしい。それが楽しみです。

聞き手=岩槻歩（川崎市市民ミュージアム学芸員）

2013年9月19日、東京にて収録